第３回　山里の祭り

－額田地区に伝承されている祭りを中心に－

平成２７年９月２８日

１　額田地区の環境

（１）　地理的環境

①　山地

額田地区は、三河高原の西端に位置しており、海抜５０～７９０㍍の間にある。額田地区の９８㌫が山地であり、三河山地の傾斜を受けて、東から西または南西に向かって緩やかに傾斜している。額田東部には、標高４００～６００㍍の山々が連なっており、最東部には本宮山(標高７８９㍍)が位置している。

本宮山から南西へかけて額堂山などの山々が連なり、これらの山々は、豊川市との市境になっているだけではなく、西三河と東三河を区別している。また、矢作川水系と豊川水系との分水嶺にもなっている。

②　地質

額田地区の地質は、領家帯を形成している変成岩類や花崗岩類などの古い基盤岩類と、その上に乗る新しい堆積層から成っている。概観すると、寺野―木下(きくだし)―千万町(せまんぢょう)を結ぶ線の南側には、変成岩類が広がり、北側には、花崗岩類が分布している。また、保久(ほっきゅう)・小久田(おくだ)・桜形(さくらがた)などにも、一部変成岩類が見られる。

③　河川

額田地区の河川は、すべて矢作川に流れ込んでいく矢作川の支流である。大きな水系としては、南部の男(おと)川水系と北部の乙(おと)川水系の二つがある。乙川は、巴山に源を発し、千万町・木下・桜形・鍛埜(かじの)地域を流れている。男川は、本宮山に源を発し、牧原(まきばら)・石原(いしはら)・明見(みょうけん)・淡渕(あわぶち)・原(はら)・樫山(かしやま)を流れる。また、一部ではあるが郡界川の恩恵を受けている地域もある。

（２）　伝承地としての額田

額田地区を数年かけて歩いた中で、強く思ったことの一つに民俗事象の残存形態が比較的緩やかに推移しているように感じたことである。以下、伝承地としての魅力を紹介する。

①　男川水系の農業形態、特に石垣棚田の顕著な分布と遺構が多く残されている。

②　明治以降の植林によって林業が盛んである。

③ イノシシ・シカ・サルの被害と共生という点で、シシ垣の分布を通して考えることが出来る。

④ シイタケ山の恵みがムラ社会の存続に重要な役割を果たしていた。

⑤ 男川水系に天王信仰の拡がりが顕著に認められる。

⑥ 南部地域（男川水系）の祭りには神輿渡御が見られる。

⑦ 北部地域（乙川水系）には馬（牛）頭観音が濃厚に分布している。

⑧ 額田地区全域に数多く分布している農村舞台。中でも大型の回り舞台を持つ地域が北部に残されている。

⑨ 庚申信仰が南部地域に濃厚に残存している。なかでも細光町上組に伝承されている事例ではシマイ庚申で擂鉢を被るという儀礼を伴う。

⑩ 南部地域では、両墓制的遺構が多く見られる。

⑪ 北部地域では、イットウ墓、一人一墓、屋敷墓が顕著に見られる。

⑫ お祭り矢場の存在と地域での伝承形態が比較的きちんとした形で残されている。

⑬ 同族祭祀も行われている。

⑭ 特異な現象として、大代町・雨山町のみに残存しているコト八日行事。また、当（頭）屋祭祀（宮崎：オトウダイコン、石原：アマザケトウ）。さらに、現在大代町のみに残っている松飾りとしてのオニンギを供える習俗を挙げることが出来る。

⑮ 北部地域のみに残存している田の神（桜形町）の存在

2　山里の祭りの実際

（1）　コト八日行事

コト八日とは、2月と１２月の八日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われている。2月８日をコトハジメ、１２月８日をコトオサメと呼ぶ（地域によっては逆になる）。

愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、北設楽郡と岡崎市大代町と雨山町の数ヵ所のみである。大代町と雨山町では2月８日のコトハジメに、田畑や山の仕事を開始するにあたり悪霊を３体の藁人形に憑依（ひょうい）させて、子どもがムラ境まで送る「オカタ送り」が行われている。

① 大代町の場合

２月８日のコトハジメの行事を**「オカタ送り」**と称し、３体の藁人形（殿様・姫・下郎）に悪霊を憑依させてムラ境まで子ども達が鉦、太鼓を鳴らし**「ニガツヨウカノコトハジメ」**と唱えながら人形を送り、大人は「オカタ送り」に合わせて正泉寺で百万遍の念仏を行う。

●当日の流れ

・１５時３０分：正泉寺集合。準備
・１６時００分：読経・御祓い
・１６時４０分：オカタ送り開始
鉦（１人）、太鼓（２人）、人形（３人）、御幣（１人）
鉦１回、太鼓１回、「ニガツヨウカノコトハジメ」
・１６時５５分：ムラ境到着
人形と御幣を置き、軽く拝み、急いでもと来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。**「振り返ると悪霊に取り憑かれる」**と言われている。
・１７時１０分：百万遍終了。後片付け。解散
※コトオサメ（１２月８日）も昭和５０年頃までは、行っていた。

② 雨山町の場合

雨山の「オカタ送り」（**オクリゴト、送り神**とも称していた）は、**コシ**（舟形のカゴ＝乗り物）に乗せた３体の藁人形【侍の大将、お供（船頭とも伝える）、１体は女性と決められている】を雨山ダムのオカタ場まで子ども達が鉦を鳴らし「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱えながら人形を送る。

●当日の流れ
・１４時５０分：参加する子ども、親集合
・１５時００分：読経、お参り。
・１５時３０分：オカタ送り開始
鉦（１人）、コシに載せた人形（２人）、ハタ（２人）の順番に並び、「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱え、鉦を２回鳴らしながら行く。
・１５時５５分：オカタ場到着
到着するとオカタとハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、その後は振り返らずに黙って帰る。
・１６時２０分：年長者が鉦を寺へ戻し終了
※参加者は、男子のみであったが、子どもが減り２０年くらい前から女子も参加するようになった。

（２） 千万町神楽・雨山神楽

額田地区では千万町町（八剱神社）と雨山町（熱田神社）の２ヵ所で、祭礼に合わせて獅子舞神楽が奉納されている。いずれも獅子頭を付けた舞い方が女物の着物を着て、後持（しりもち）方が幕を持ち、囃子方の横笛、太鼓、唄に合わせて神楽を舞う形態で**嫁（娘）獅子**と呼ばれる。左手に御幣、右手に鈴を持って舞う「鈴の舞」と、獅子頭の幕を広げて舞う「幕の舞」が伝承されている。悪魔を喜ばせ、鎮魂、退散させ、

豊穣を祈り、幸せを引き寄せる舞である。千万町神楽は、昭和３９年３月に愛知県無形民俗文化財に指定されている。

① 千万町神楽

・奉納される日：４月第３日曜日に実施される八剱神社春の大祭（かつては、４月１６日に固定されていた）。１０時３０分頃奉納

・神楽の伝承：千万町はおよそ４０戸、２００人弱が在住している。荻野姓が多い。舞方や才藏（後持方）は**父子相伝**で伝承されていた。現在は、町民で構成する千万町神楽保存会によって継承

・文献に見られる神楽：宝暦年間（１７５１～６１）に八剱神社祭礼で獅子舞が奉納された記録が現在のところ一番古い。

・若宮社への神輿渡御：金的も無事に上ると定刻とされる１４時頃に、送り囃子が奏される中、若宮社へ**神輿渡御**となる。

・若宮社での神楽奉納：鈴の替りに各所に飾られている造花を持ち、観客とふざける掛け合いが入るため「ホラ入り」と言い、舞も**「ホラの舞」**と言われている。舞方も才藏も決められた装束は着けず法被などの姿で舞う。

② 雨山神楽

・奉納される日：熱田神社大祭（４月第４日曜日）を含め、年４回奉納される。

・神楽の伝承：以前は地元で神楽を舞っていたと言われる。久しく途絶えていた。昭和初めに復活。獅子頭をつける舞方、後ろでバチを持つシリモチ、囃子方（太鼓１、横笛２）で行われている。

（３） 夏山柿平下の天王祭祀

かつては、**「提灯祭り」**と呼んでいた。仮屋の祠を建てた後、子どもも参加して、花火などを行い、多くの提灯を結界縄などに付けて、それを各戸に持ち帰って飾り、祭りの夜は賑やかであった。現在は子どもも少なく、祭りとしての子どもの参加は無い。以下、仮屋造りの手順を記す。

① １３：００：ショウヤさんが挨拶の後、作業開始

② 旧祠を社守が塩で浄めて参拝

③ 神札を取り出した旧祠は皆で壊していく。祠の基本となるパーツは旧祠のものを写し取りながら竹を切り分けて行く。設計図は無い。

④ 作業は自然に役割分担され、年配者が細かな作業をし、女性は境内周囲の清掃

⑤ 旧祠の不要になった材を燃やす。その火で竹を炙り少しずつ曲げて祠の天井枠、一番下の基礎となる横の床枠を作る。

⑥ 竹の柱を建てる。旧祠と同じ柱穴に建てて行く。旧祠を基準として高さ等が平

行になるよう調整。

⑦ 祠の正面を除く三面に底枠を一段目として六段の横骨組を固定する。

⑧ 骨組の上にヒノキ葉を敷いて、その葉の上から骨組の竹とで挟み込み、紐で縛り固定する。

⑨ 屋根の飾りとなる竹を祠に取付ける。

⑩ 縄を準備。左縄で綯う。仮屋の注連縄１本。境内に張る結界用の細縄

⑪ 玉串や御幣の準備

⑫ 御簾や戸口の飾りを旧祠のものを見ながら作る。

⑬ 祠全体が出来上がって来た頃に、結界縄を境内に張り、それに提灯をぶら下げ、シデ（紙垂、四手）を取り付ける。※紙垂：吉田流、白川流、伊勢流

⑭ 神札（下が昨年、上が今年の札の２枚を重ねる）を納める。

⑮ 供物を供える。ショウヤさんが準備。塩、米、御神酒、野菜（ニンジン、ナス、ピーマン）

⑯ 社守による祝詞奏上

⑰ 最後に般若心経を皆で唱える。

⑱ ショウヤさんが挨拶をして終了

※ショウヤとは、神札を貰い受けに行く他、祭りの準備を行うイエ。毎年回り番で行う。

※祭礼日は、７月１５日に近い週末

（４） 夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮は古い歴史を持つとされ、伝承によると継体天皇の２５年（５３２）７月２４日、天津日子根命を奉祀し創建され、その後、元慶４年（８８０）８月２４日に應神天皇、宗像三女神、住吉大神を合祀して王宮八幡宮と改称したと言う。また、火祭りに使用されたとする永禄元年（１５５８）銘のある獅子頭１頭が宝物として伝承されている。

夏山郷は平針、寺平、柿平、井之口、鬼沢、寺野の６ヵ村であったが、明治８年に井之口が柿平に吸収され、５ヵ村となる。現在、夏山八幡宮は夏山地区５集落の総氏神として１８０戸を氏子としている。

① 火祭り

火祭りは、夏山八幡宮の年４回行われる中祭の一つに位置付けられ、現在は旧暦９月９日に近い土曜日に実施している。夏山の５集落のうち、柿平と平針が１年交代で火祭りを担当する。

祭りの最大の見せ場は、「ソダ山」と呼ばれる生木の山に火を付けて、面を被った鬼と鬼の親あるいは師匠的な役を果たすババが様々な所作を行うところにある。その時、鬼が上手く所作が出来ないと、参詣者が囃し立て、鬼はソダ山から燃え

木を持ち、境内の参詣者を追い回す行動に出る。参詣者も負けずに「ボケ、ボケ」「バカ鬼、バカ鬼」と鬼を囃し、歓声を上げながら逃げ回り、鬼と一体となり盛り上がる。鬼の燃え木に打たれると厄除けとなり、その年は病気にかからないと言われる。参詣者も**「打たれに行く」**と言って祭りに参加する。

② 火祭りの流れ

・１２時３０分：「ソダ山」作り・・・境内
・１２時３０分：注連縄、鬼の装束作り・・・拝殿
・１３時３０分：太夫（３～５人）白装束に身を包み、水垢離
・１４時３０分：火熾し（火錐神事）
・１６時００分：採火
・１７時００分：祭式
・１７時２０分：神降ろし（平針地区が担当する時のみ行われる）
・１８時２０分：ソダ山点火

③ 所作

・カマショ
・鬼追い
・獅子討
・相撲
・鈴の舞
・小刀の目利き
・薙刀の舞

（５） 当（頭）祭祀の実際

当（頭）祭祀とは、神社の祭りや講などに際し、神事や行事の世話をする人、またはそのイエのことを当（頭）屋と言う。その多くは１年交代で当（頭）を務め、選出は神クジあるいは家並順や帳簿などの記載に基づき輪番で行うことが多い。当（頭）屋が重要な役割を担い行われる神社の祭祀を当（頭）屋祭祀と言う。

① 宮崎神社「オトウの神事」（「オトウダイコン」）

旧暦１１月１日に行う宮崎神社の神迎え神事を「オトウの神事」と言う。この神事において、神饌とするオシロジロ（粢）と輪切りダイコンの味噌煮＝オトウダイコンを準備する任にあたることをオトウと称す。オトウは毎年クジで選出される社守２名と、前年度社守を務めた２名の計４家族が当（頭）屋として務める。

ダイコンは各戸から２～３本集められ、神迎え神事の３日前から準備が始まる。ダイコンは、皮を剝いて長さ５寸（１５㌢）の輪切りにし、真っ白のダイコンが味噌の味が沁みて真っ黒になるまで一昼夜かけて煮込む。その量は２００～２５０切、大きなお釜２口とハソリ１口を使用する。この行事は、宮崎神社の氏子全

体の行事ではなく、明見町のみの行事として行われている。

※平成２７年は、１１月２２日（日）

② 石原町石座神社「神迎え行事」(「アマザケトウ」)

石座神社の神迎え行事は宮崎神社と１週間ずらして行われる。平成２７年は、１１月２９日（日）に行われる。神迎え神事では、石座神社六座社【本殿四座の石座、日吉、稲荷、天照皇大神／猿田彦（消滅した田原坂にあった社）／山之神】にシロジロ（粢）とダイコン舟に白神酒（甘酒）を入れた特殊な神饌を献供する。神事に従事する者は、前日から境内にある石原集会所にてオコモリをして準備作業を行い、神事の中心となる者は、早朝に境内横の室合内川で禊を行う。

（６） 石座神社大祭（祇園祭り） 神輿渡御の例として

石座神社秋の大祭は、神輿の渡御に合わせて、盛大にお練り行列が行われている点が特色として挙げられる。各種幟や道具類は２０種以上あり、行列における役割がある者だけでも５０人以上となる。以下、お練りの内容を記す。

① 塩播き
② 先払い
③ 梵天（２本)
④ 太一大神宮幟
⑤ 大神宮御鍬幟
⑥ 組幟
⑦ 石座大明神幟
⑧ 日吉神社幟
⑨ 稲荷大明神幟
⑩ 天満宮幟
⑪ 金毘羅幟
⑫ 室合内御鍬幟
⑬ 相野御鍬幟
⑭ 賽銭箱
⑮ 燈籠
⑯ 五色幟
⑰ 石座神社小幟
⑱ 三社額面
⑲ 榊持ち
⑳ 笹踊り
㉑ 鉾
㉒ 傘鉾
㉓ 正社守
㉔ 御神輿回し
㉕ 大傘
㉖ 宮司
㉗ 神官
㉘ 御神輿付き
㉙ 随行員
㉚ 拍子木
㉛ 打ち囃子
㉜ 交通整理

（７） 祭礼と矢場

額田地区を訪ねると、矢場が設けられている神社を数多く見ることが出来る。矢場の射小屋には所狭しと、多くの金的奉納額が掲げられている。金的奉納額は、額田地区全体で５００程確認できる。宝暦９年（１７５９）の額が最も古い。

この地域では、現在も３人の弓の師範がいて、後進育成や祭礼弓が行われる矢場

の維持管理などに取り組んでいる。流派としては、大和流、日置流印西派、日置流雪荷派が継承されている。

神社の祭礼に弓射の奉納が行われることを「お祭り弓」、またその場所を「お祭り矢場」と称し行われている。弓・矢は古くから武器としての道具だけでなく、霊的な力を持った呪具としても用いられ、魔を祓い神意を占う機能を有する。五穀豊穣や村中安全、無病息災、子孫繁栄などを願うムラの祭礼において、金的（悪魔の眼を象徴すると言う）を射落とすことで厄難を取り除くことが出来ると信じられている。そのため、金的中しなければ厄払いが済んでないとされ、祭礼のお練り行列が出立できないとされることも多い。

（８） 農村舞台

三河山間部は、信州と共に、農村舞台の文化圏を形成していた。額田地区にも江戸から昭和にかけて建てられ、使用された農村舞台が存在している。男川水系で現在も舞台が確認できるのは８ヵ所、乙川水系では、９ヵ所である。ただし、大型の舞台で回り舞台を有しているのは、乙川水系に存在している。

① 豊楽座

大高味町の大川神明宮の社殿に向き合って建っている。豊楽座称し、明治・大正・昭和にかけて地域に親しまれてきた農村舞台である。築造は、明治１５年５月２５日

●舞台の構造

・間口１０.９㍍、奥行９.０８㍍、高さ１０.９㍍の入母屋造りである。茅葺の舞台。舞台内部は、直径６.１８㍍の回り舞台を持っている。回り舞台の構造は、床下で操作をする方式を採っている。床下に２２個の木車付の皿回し式の台座を組み、盆の背面４ヵ所に腕木が取付けてある。

・太夫座、花道が残っている。

・セリは天井から奈落まで上下する大セリが存在した。

●豊楽座の復活

・大正１１年には、市川団吉が上演している。

・昭和１１年には、一角春雄らが上演している。

・舞台を最後に使用したのは昭和３０年である。

・平成２年復活公演

・平成１４年文楽公演

・平成１６年東面茅葺屋根葺き替え。

② 鳳凰座

保久町保久八幡宮の拝殿向って左側に建てられている。明治２７年に改築され、昭和６２年屋根葺きと周囲、上部トタン、下部板張りの修復が行われた。鳳凰座

と称し、明治２９年に奉納された鳳凰座と染め抜かれた幕が現在も大切に保管されている。昭和３０年代以降は、舞台も使われなくなった。平成１６年には、舞台を利用して、鳴子踊りを披露した。

●舞台の構造

・間口１４.５㍍、奥行９.０㍍、舞台高さ０.６７㍍（玉石上）、回り舞台直径６.３㍍

・切妻造り瓦葺

・左右には、太夫座が残っている。

・皿回し式回り舞台

写真資料

大代コトハ日「オカタオクリ」

雨山コトハ日「オカタオクリ」

大代コトハ日　ムラ境に置かれたオカタ

雨山コトハ日　ムラ境に置かれたオカタ

千万町「嫁（娘）獅子神楽」

千万町神楽「ホラの舞」

雨山「嫁（娘）獅子神楽」

夏山柿平下天王祭祀「仮屋造り」

夏山柿平下天王祭祀「社守祝詞奏上」

夏山八幡宮火祭り「火錐」

夏山八幡宮火祭り「鬼追い」

宮崎神社「オトウダイコン」

宮崎神社オトウ神事に供えるオトウダイコン

石座神社アマザケトウ「ダイコンの舟」

石座神社猿田彦に献供された特殊神饌

石座神社大祭

石座神社大祭「笹踊り」

金的的中

大川神明宮農村舞台

回り舞台の構造